

大津のプライド 銅銭糖

白川北側平地北半の約700町歩（695ha）の水田を潤していた用水路の堰である「瀬田上井手取水口」。町内を流れる上井手の水は、この取水口から取り入れる白川の水から始まっている。

第一部 水と大津町

大津町の名前の由来

大津町は、阿蘇の外輪山から流れ出す伏流水が豊かなところ。地域の郷土史である「合志川芥」という書物には、「此の所は「火児国大水（ヒゴノクニオオズ）」と呼ばれていた」とあります。また、この一帯は古く肥後の豪族合志氏の支配下に属し、戦国の頃、永正年間（1504年～1520年）に佐々木合志の支族十郎義廉（氏不明）が東嶽城（現日吉神社地）を築き、城主になるに当たり、「大水（おおづ）」と同じ読み、雅名を求めて「大津」と改名し、さらに自ら新しい領地名に則り「大津」を氏として、「大津十郎義廉」と名乗ったのではないかとされており、これが大津の地名の由来と推定されています。

清正と水車

1587年（天正15年）、豊臣秀吉は、佐々成政に肥後の国守を任命します。成政は、入国

4年）に上井手の工事を始めます。しかし、上井手を完成させるのは、非常に難しく、一度は掘削を進めたものの失敗してしまいます。結局上井手が完成するのはそれから38年後のことでした。

水車の活躍

水は生活を豊かにします。水により人が集まり、水が流れることで水田ができます。井手の完成で地域に潤いがもたされた。井手のおかげで一大穀倉地帯となった大津町。水田に水を引く揚水車として、精米や精麦、製材、精油などの動力として水車を利用されるようになります。明治時代になると、次々に水車が造られました。現在は、製粉などや揚水車としての役割を持つ水車は残っていませんが、上井手公園に行くと実際に動いている水車を見ることができます。

早々「検地」を行います。国内の

抵抗（肥後国衆一揆）に

遭います。この失敗のため

成政は、切腹を命じられます。

翌年の1588年（天正16年）肥後熊本藩の初代藩主となる加藤清正（1562年～1611年）が、二重峠を越えて入国しました。峠の頂から白川の流れや大津方面を望んだ清正は、案内者に土地や川のことを詳しく聞いていたそうです。

そして、肥後に入国後初めて行ったことが、下井手の作



下井手屋形井樋

り直しだったと言われている。清正は土木技術にとっても優れていたと言われ、白川から用水路をつくり、水を引くことで土地に多くの水田を増やし、人々の暮らしを安定させようと考えたのです。下井手が完成すると、今度は上井手の計画に取り掛かります。しかし、清正1611年（慶長16年）に亡くなってしまいます。そこで息子の忠広が父の計画を引き継ぎ、1618（元和

大津町の水の歴史

- 1589年（天正17年）加藤清正が下井手の工事に着手
- 1598年（慶長3年）下井手が完成
- 1618年（元和4年）加藤忠広が上井手の掘削に取り掛かる
- 1632年（寛永9年）上井手工事、一時中断
- 1636年（寛永13年）細川忠利が上井手の工事に再び取り掛かる
- 1656年（明暦2年）上井手が坪井川まで完成する

※大津町の歴史は諸説あります。

加藤清正（かとう・きよまさ）

安土桃山時代から江戸時代初期にかけての武将・大名、肥後熊本藩初代藩主である。豊臣秀吉の家臣として仕え、各地を転戦し武功を挙げ肥後北部を与えられた。秀吉没後は徳川氏の家臣となり、関ヶ原の戦いの働きによって肥後熊本藩主となった。賤ヶ岳本槍の一人である。

